そろばんとバランスシート

粕谷　隆一

『バブルとは、グローバル化による世界システムの一本化のうねりに対して、それぞれの国や地域が、固有の文化や制度、人間の価値観を維持しようとしたときに生じる矛盾と乖離であり、それが生み出す物語である』　バブル・日本迷走の原点（永野健二）

二〇一二年十二月の総選挙勝利からアベノミクスが始まりました。デフレ脱却が最大目標。ここで肝に銘じておかないと恐ろしいのは、デフレへの対処が、将来のバブル経済の芽となることで、その緒は繋がっている事実でしょう。見方によっては、資本主義の歴史は、バブルとデフレの循環の歴史でもあります。日本は明治以来、『資本主義』と『日本の文化』の間で、巧みにバランスを取り、歩き始めました。（資本主義の強欲さを日本的に抑制）

永野氏の分類が面白いです。

① 渋沢栄一資本主義（義利合一）

② 欧米型グローバルスタンダード（福沢諭吉）

③ 財閥資本主義（岩崎弥太郎）

八十年代バブルで見えたのは、日本独自の政・官・民のトライアングルが、耐用年数が過ぎ去って腐敗する姿でした。私はまだ生まれていないので見ることができませんでしたが、七十年代のニクソン・ドルショック、オイルショックの時点で、世界経済の骨組みが大きく変化していた事実でしょう。グローバル化と金融自由化（カジノ化）の大道です。日本はこの新しい道を回避しました。新規参入の少ない規制に守られた社会。しかし戦争に負け、その悔しさをバネに衣食住を豊かにすることに専念した時代の人達のご苦労は感謝するべきです。（私の父でなく祖父の方々です）

構造改革の痛みを先送りしたため、残された力は、土地と株に振り向けられました。ここで起きたことは重大なことだと私は思います。日本人の気質を変えたのではありませんか。人々の価値観の破壊、金がすべて、まじめに働くことが割に合わない感覚です。私が高校時代、【真面目】という言葉は揶揄されていました。

マクロの視点では、『長期的には市場はコントロールできない』厳しい事実です。

ミクロの視点、刻々と過ぎ去る個人の日々の流れです。パソコン、いやＡＩを道具にしている毎日、たまに筆を持つと、『何という字を書くのだ、もっと美しく』と年配の人達から叱られます。わが社の社長はもと山一証券にいた人で、そろばんを気楽に弾いています。『数字の確かさはそろばんが一番確かだ』という独断と偏見があります。そろばんを使うのは日本人だけ（？）だから、その脳力は貴重だそうです。指を使うので健康にも良い。私の父が札幌から帰ってきたら、そろばんを賛美し始めました。小学生の低学年に必ず徹底的に覚えさせるのは、『論語』の素読、『小倉百人一首』の暗記、それに加えるに、『そろばん』の訓練、と相成りました。札幌で、そろばん日本一に輝いた実績のある高橋百年美さんに出会ったらしい。

そろばんと関係しますが、年々驚きが高まっていくのが【バランス

シート】の存在価値です。

月々の推移表、二期比較損益計算書、二期比較原価報告書、二期比較貸借対照表の分析の面白さが、年々高まり深まっています。会社という船舶が、これからどの航路に沿って、どのくらいのスピードで、必要な負荷がどのくらいで、と、あらゆるこまごました諸要素が明瞭になっていく、緊張感のある船橋・操舵室にいる感触です。頭の先から足の先まで、X線で映し出されます。

これは、学生のひとり生活、主婦の家計簿にも使ってほしいです。

いま格差の問題が大きくなっていますが、やはり累進課税を強化し、お金のある（入る）ひとや大会社は税金を多く払い、入金の少ない方々には税金を安くして購買力を削らない方向にもっていく、こういう基本のベクトルを、日本人の【　和　】の精神ですべての人々が共有し、バブルで失った何かを復活させたいものです。　（了）

附　編集部の人がお薦め本を一冊ということなので、

――関大徹『食えなんだら食うな』ごま書房新社（二〇一九年五月刊）

【編集部　付記】（敬称略）

●永野健二著『バブル：日本迷走の原点　1980-1989』（新潮社、二〇一六年十一月二十日刊、翌年にかけて数刷を重ね、二〇一九年五月からは新潮文庫で発売中）。

・単行本の「帯」のキャッチフレーズ　――　「住友、興銀、野村、山一・・・日本を壊した「真犯人」は誰か。バブルの最深部を取材した「伝説の記者」が初めて明かす〈バブル正史〉。この歴史を学ばずして日本の未来はない」

・文庫の「帯」の謳い文句　――　「株価と地価の「大狂乱」は日本人の何を壊したか？　「失われた二十年」を招いたあの時代を、「伝説の記者」が振り返る。〈平成〉経済興亡史の決定版。ビジネスマン必読の書！」

・著者永野健二は現在、日本経済新聞社顧問。一九四九年生、京大経済学部卒。一九九一年から四年間経団連会長を務めた永野健（たけし）の二男。健の父護（まもる）の弟が永野重雄。永野健二は上記の著作を出版後、日本記者クラブ（JNPC）で自著の内容をめぐる講演を行なった（YouTube で講演と質疑応答と全て視聴、可。YouTube 投稿日 2017.3.16）。

●山一證券株式会社は一九九七年十一月に一〇〇年の歴史の幕を閉じ、重要社内資料を東大経済学部付属図書館に寄贈した。その後同資料は同学部伊藤正直教授による編集の下、極東書店が出版・発売中である（マイクロフィルム版とオンライン版と）。巨大証券会社の「全生涯」を明らかにする貴重な〈企業アーカイブズ〉として日本アーカイブズ学会でも話題となった

●岩沢靖（いわさわ・おさむ）。上記永野健二の著作の「第一章　胎動」の「2」に、「札幌を地盤に業容を広げた北海道の地場の実業家」「政商」の岩沢靖が仕手株戦にのめりこんだ事情が記されている。永野は触れていないが、この政商は札幌大学の初代理事長でもあった。